【専門の立場から～調査監修者の解説～】

新しいメディアを使って親子の会話を楽しむ時間に

汐見 稔幸
（白梅学園大学学長、東京大学名誉教授）

今回の調査結果から、乳幼児のいる家庭に、予想以上に短期間でスマートフォン（スマホ）が普及したことがわかりました。乳幼児のいる家庭だけでなく日本人の生活の必需品となっている様子が表れているのだと思います。

スマホが乳幼児の生活に、世間で懸念されているように深く入り込み、依存症状などを生み出しているのではないか等を慎重に調べましたが、結果はそうではなく、乳幼児が長時間利用している家庭はごくわずかであり、外遊びや絵本を読むなどの時間が減少しているわけでもなく、1 日の生活の中にバランスよくメディアを取り入れようと保護者が配慮している様子がうかがえるものでした。視聴する内容やルールについても気にかけている家庭がほとんどで、乳幼児のメディア利用に対して社会の方が過度な心配をしなければならない、という結果ではありませんでした。

現在は、スマホが一般家庭の生活でどう位置付いていくか、いわば模索が続いているのだと思います。自分の周囲の世界のことをもっと知りたい、レシピなどの必要な情報を楽に手に入れたい、できれば映像情報も手軽に得たい等々は、いわば人間の本能でしょう。その意味で、調べたいことがすぐに調べられ、しかも映像やゲームが楽しめる身近なメディアに、子どもが興味を持つのはごく自然のことと思われますが、その可能性と限界についても自然と理解されていく可能性があることが示唆された結果だったように思います。

今後、電子絵本などが普及し、3D映画のように立体的な映像を手軽に楽しめるようなツールが出てくることも予想されます。今回の調査では、乳幼児は主に映像や音楽などを利用している様子が浮かびましたが、今後、これらの新しいメディアが出てきたとき、その可能性や課題をていねいに吟味しながら、その活用の仕方を家庭が模索することによって、各家庭でより豊かな親子関係と親子の会話を楽しむ時間が増えることを期待します。

あわせて強調しなければならないことは、メディアから間接的に情報を得るだけでなく、実体験も当然ながら大切になるということです。メディアで得た知識を真の理解へと深めるには、実際に五感を使って感じることが絶対条件だからです。学校でアクティブ・ラーニングの大切さが強調されるようになってきましたが、それは乳幼児も同じで、動画や絵本等の間接情報と豊かな実体験が脳でつながることで、知識が身体に刻み込まれ、智恵とつながる知性が身につくのです。

テレビから「スマホ」へ

榊原 洋一
（お茶の水女子大学名誉教授、チャイルド・リサーチ・ネット所長）

前回の第 1 回調査（2013 年）から、たった 4 年の間に、子育て家庭におけるメディアの使用状況に大きな変化が起こっている、というのが今回の調査結果を見た時の最初の感想です。家庭でのスマートフォンの所有率が、4 年前の約 60％から、1.5 倍増の約 93％になっています。これはテレビ所有率の 98.3％に迫る数字です。子どもがスマートフォンに接する機会も 50％から 70％へと急増しています。

子育て環境でのスマートフォン使用を心配している方々にとっては、こうした変化は大きな脅威に映るかもしれません。しかし、スマートフォンの使い方を見ると、それは杞憂だと思います。用途を見ると、スマートフォンやタブレットは、主に「写真を見せる」「動画を見せる」「写真を撮らせる」「一緒に踊る」といった、親子一緒の場面で使用されています。「ゲームをさせる」といった一人で使用させる回答者は少数なのです。

アメリカ小児科学会も、デジタルメディアを他人とのコミュニケーションの手段として使うことのメリットを認めています。日本の家庭ではスマートフォンは、親子のコミュニケーションの手段として使われているのです。

今回の結果で唯一気がかりであったのは、スマートフォンに比べて、タブレットの所有と使用が比較的少ないことです。なぜなら、画面の大きさや操作性の上で、例えばデジタル絵本を見たりするには、スマートフォンよりタブレットのほうが有望だからです。

養育行動の一つとしてのメディアの活用

菅原 ますみ
（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系教授、同大学人間発達教育科学研究所所長）

デジタルメディアコンテンツは、絵本などと同様に、大人が一緒に視聴しながら内容について「〇〇はどうしてうれしいのかな？」「どこにあったのかな？」など質問形式で対話すると、よりたくさんの言葉を覚えたりお話の理解が進んだりすることが先行研究から明らかになっています。今回の調査結果から、普段から子どもによく関わり、話しかけている母親は、メディアの内容に関する子どもとの会話も多いことがわかりました。乳幼児の生活からスマートフォンを完全に切り離すことはもはや現実的とは言えません。今後は、デジタルメディアを含む様々なメディアを、子どもの遊びや学び、親子のコミュニケーションのツールとして上手に活用するリテラシーが重要になってきます。

乳幼児のデジタルメディアの利用用途が、おもに家族や子ども自身が撮影した写真や動画の視聴であるという結果も興味深い結果です。写真を自分で撮っている子どもも少なくありませんでした。一般的に懸念されている受動的な視聴とは異なる実態が明らかになったといえるでしょう。子どもが撮影したものを通じて、興味を惹かれた世界を子どもの目線から知ることができるようになり、それを家族で共有していくことは親子のコミュニケーションの深化につながっていくのではないでしょうか。デジタルメディアを使った子どもの表現活動が発達にどう関わるのかは、今後の研究課題としても重要だと感じます。

メディア特性を踏まえた活用を

佐藤 朝美 先生
（愛知淑徳大学准教授）

本調査から、スマートフォンの普及はめざましく、親の利用拡大に伴い、子どもの使用の低年齢化、頻度・時間の増大が見られます。一方で、子どもの生活時間を見ると実体験の活動とのバランスを取っている様子が見られ、写真や動画を撮影させたり見せたりする等、家族での対話が想定されるケースもうかがえました。

スマートフォンというメディアの特徴を改めて挙げると、映像視聴、アプリ使用、写真撮影、テレビ電話ができるなど多機能で、いつでもどこでも利用可能な点があります。また、画面が小さく、子ども一人で専有し易いのも特徴です。今後は、スマートフォン全体の善悪を問うのではなく、どの部分にリスクがあり、どのような使用法に可能性があるか、詳細に見ていく必要があると思います。

また本調査では、スマートフォンの視聴（使用）ルールを定める割合が減少していました。親の所有物であることから管理が行き届いていることや、アプリ会社が提供するアラーム機能があることが要因かもしれません。しかし、この時期から使用制限を設け、戦略的に親が主導を握ることが、将来子どもが主体で利用する際に有効となるでしょう。

本調査の年代の子ども達は、大好きな親を常に観察し、そこから学ぶことが大きいのも特徴です。親のスマートフォンの使い方が子どもへ与える影響が大きいと考えられます。他メディアを含め、その特徴をいかし、メリットを最大に享受できるよう活用して欲しいです。